

定本聊齋志異卷六

定本聊齋志異卷



定本 聊齋志異 全六卷
卷 六

昭和三十年十二月十五日 初版印刷
昭和三十年十二月二十日 初版發行

定價九百五拾圓

譯者 柴田 天馬

發行者 秋山 修道

印刷者 中内 佐光

發行所 株式會社 修道社

東京都中央區日本橋小舟町二丁目四番地
電話赤坂町(66)一七三四、四〇八三番
振替口座(東京)六一六九一番

落丁、亂丁のものはお取替へいたします。

印刷所・鈴木製本

續	三	修	劉	藥	王	李	彭	任	金	織	驅	邵
女	仙	客	姓	僧	大	缸	秋	秀	永	成	怪	梅
.....												
三	一〇	一二	一五	二二	二三	三一	三五	四六	五〇	五一	五九	六三

[illegible]

于江	柳氏子	胡氏	李伯言	牛瘡	葉生	醜狐	祿數	珠兒	寒月芙蓉	桓公	孫生	汪子秀	金和尚	牛飛	劉海石
一五	一五七	一六二	一六六	一七一	一七五	一八一	一八五	一八七	一九七	二〇四	二二一	二二八	二三三	二三八	二九

毛 大 福	二九七
庫 將 軍	三〇一
孝 子	三〇一
天 宮	三〇四

聊齋志異考	三二一
-------	-----

一、書 名	三二三
二、著 者	三二六
三、經 歴	三二一
四、著 書	三二五
五、志異の起稿及び脱稿	三二九
六、志異の出版	三三一
七、註 釋	三三九
八、内 容	三四〇
九、志異中の三教	三四二

學校と文舉		三四七
學 校		三四七
文 舉		三五三
細項目一覽		三六五
原 本 順		三六七
譯 本 順		三八三
アルファベット順		三九七

扉・挿畫 福田 貂太郎

定
本
聊齋志異
卷六

續 女

紹興のある寡婦が夜續をしてゐる忽、一の少女が戸を推しあけて入つてきた。

「老姥さん、乃勞ぢやあり無乎？」

笑して曰ふのである。視之と、十八九の儀容秀美い娘で、炫麗やうな袍服をきてゐた。媼さんは驚いて、

「何から來たんです」

と問くと、女は曰つた、

「媼さんが、獨り居しで、お憐だ故、お相伴になり來たのよ」

媼さんは侯の門から亡げてきた人だらうと疑爲つて、苦相詰た、

「媼さん、懼ら勿いでよ。妾も亦、媼さん猶に孤きりなの。我、媼さんの潔すきなのが愛つた故、

相就んです。兩方で岑寂く免るから、固で佳いんぢや不の」

媼さんは、又は狐だらうと疑爲て、默然と猶豫つてゐた。すると女は、牀に升つて、媼さんの代りに續きながら、

「媼さん、憂し勿くてもいゝの。此等生活なら、妾し優に爲てゆけるわ。口腹ことで累はかけ不いから」

と曰つた。媼さんは、女が温婉で、可愛らしいのを見て、やつと安之したのである。

夜が深けると、女は媼さんに謂曰た、

「衾と枕を携つて来て、門外において在るんです。洩に出た時、捉つて入つて代煩ね」

媼さんが出てゆくと、果して一裹の、夜のものゝ衣があつた。女が包みを解いて榻に陳べたのを見ると、何といふ錦繡か知らないが、比無く滑らかな、そしていゝ香ひのするものである。媼さんも布の被で與之共楊た。女は羅裙を甫解だ。異香が室中に満ちわたつた。媼さんは既寢私かに、此んな佳人に遇へたのに、此の身が男で無いのは、惜しいことだと念つたのである。

女は於枕上、

「姥さんは七旬にもなつて、猶だ妄なことを想ふのね」

と曰つて笑つた。

「そんな事は無之よ」

「妄なことを想は無い既、奈何男に作りたいなんて欲つたの？」

媼さんは、益々狐たと知爲つて、大く懼れた。すると女は又笑曰た、

「男に作りた願てるくせに、何心而又、あたしを懼がるの」

媼さんは益々恐れて、股が戦へた。牀が揺れるのである。女は曰つた、

「如此ぐらゐの膽の太さで、還り男に作り欲いとは！ 實を相告ば、我は眞の仙人です。然し、汝を禍ひする者ではない。但だ、言葉を謹まねば須ん。さうしてゐれば、自然と衣食に不足はないのです」

翌日媼さんが、朝早く起きて、牀の下に拜伏すると、女は臂を出して媼さんを挽きおこした。臂は脂の如に膩して、熱な香ひが噴溢れ、肌に一著つた人は、皮膚が鬆るやうな快よさを覺えるのである。媼さんは心を動かして、又遐なことを想ひ渉すのだつた。

「婆子は戰慄が裁止つたら、心が又何處かへ去つたのね。丈夫にしたら、愛情のために死んでしまふ當よ」

女が哂ふと、媼さんは曰つた、

「是丈夫だつたら、今夜は死なずにゐられ那得わ」

由是二人は心浹洽くなり、毎日同に操作たが、女の續いだものを視ると、細く勻つて出光がある。布に織爲ば、錦のやうに晶瑩するのだ。それで、價が常の糸に較べて、三倍もするのであつた。

媼さんが出てゆく則、女は戸を局め、媼さんを訪ねてくる者が有れば、別な室にゐて應之したから、半載も居んでゐたが、知る者は無かつた。

後になつて媼さんは、漸だん親類や里中の人に洩すやうになつた。媼さんの姉妹行は、媼さんに託んで、女に、見つてもらひ求といった。女は媼さんを護めた、

「汝が言葉を慎ま不から、我は、久く居られ不能だらうよ」

媼さんは失言つたことを悔して、深う自責つた而、見つて求れといふ人は益々衆くなつてきた。な
かには勢力を笠に着て、媼さんを強迫する者さへ至つた。媼さんは涕泣して女に自陳た。

「若し諸女伴なら、見つても妨は不が、輕薄兒がゐて狎侮に見る將な事が有る恐から、もう一切あひ
ません」

女は許してくれなかつた。媼さんは哀願し、懇願した。その困つた様子に動かされて、始と許之てく
れたのである。

越日になると、老媼や少女が、線香を煙らせて、相屬於道あひにくる、女は其の煩はしさを厭つて、
貴でも賤しいひとでも、悉な語を交へなかつた。惟だ、默然と端座して、朝參に聽せておいた。

郷中の少年たちは、女の美しさを聞いて神魂を傾動かし、見はしてくれといふものが、絶えなかつた
が、媼さんは悉く絶つた。

邑に、費といふ名を知られた秀才が有つた。財産の殆どすべてを傾し、重金を媼さんに啗つたの
で、媼さんは諾し、あつてやつてくれと、女に請んだ。女は已に、それを知つてゐて、媼さんを責め
たのである、

「汝は、我を賣つたね！」

媼さんが、地にひれ伏して自投ると、女は曰つた、

「汝は其の賂に食れ、妾は其の痴情に感した。一とめ見つて可以ませう。然而し、これでおまへの
縁分は盡きたよ」

媼さんは又復、額を地に叩いてあやまるのだつた。

女が、明日と約束したのを聞いて、生はひどく喜び、次の日、線香と燭を具へて往つたのである。門を入つて、長に拝をすると、女は簾の中にゐて與語すのであつた。

「あなたは、産を破してまで、相見たいといはれる。妾に、何な教をしようとなさるのです」

女が聞くので、生は曰つた、

「實、他に何といふ所干は不取のです。祇だ、毛嬙とか、西子とかは、傳へ聞いてゐる徒得ですから、如し、冥頑やつたと、お見棄てに不以なら、お姿を現はして、私の眼界を一闊けてくだされば、下願已足です。休咎などは自然に定數つてゐるのですから、聞き樂とはおもひ非所」

すると忽ち、幕の中の容光が射露つた。翠の黛、朱櫻のくちびる、見え不いところは無いのだ。生は意眩神馳して、不覺傾拜んだ。拜んで已、起ちあがつたときに則、厚い幕が沈々にたれ、聲は聞えるが、姿は見えなかつた。悵悵し間、竊かに、下體を不観かつたのを恨んだときである。俄、簾の下から、繡をした履が一雙、翹と見えた。指にも不盈ほどの瘦さである。

生が又拜をすると、簾の中の女は曰つた、

「君は歸つてお休みなさい。妾體情たから」

媼さんは、生を別室に延れてゆき、茶を煮れて供すと、生はやがて筆をとつて、南郷子調の一曲を壁に題した。

隠約と書簾の前に、

三寸の凌波、玉筍のごと尖し。

點地て分明なり、

蓮瓣の落ちて緘々なるが、

重臺を再著なば、更に可憐からん。

但だ願ふ蝴蝶と化爲て、裙邊に去かんと。

餘香を一嗅ば、死も亦甜ぜん。

題いて畢ふと去つていつた。女はその題を覽て、不快さうに、媼さんに曰つた、

「緣分が盡きたと、我の言つたことが、今、不妄になつたね」

媼さんが地にひれ伏して請罪ると、女は、

「罪が、盡汝に在るのではない。我が偶と、愛情の障に墮ちて、色身を人に示せた途、淫けた詞で

汚褻された。此れは皆な自ら取いたので、汝には尤は何い。若し速く遷らぬと、この身は愛情の窟に陥

ちて、轉の劫から出られなくなる恐う」

と曰ふと、被を縋んで出ていつた。媼さんは、挽きとめようと追ひかけたが、轉瞬失くなつたのである。